

ᑭᑭᑭᑭᑭᑭᑭ ᑭᑭᑭ ᑭᑭᑭᑭᑭᑭ ᑭᑭᑭ

新ノヒュア(語)基礎的文法書

第三案

ᑭᑭ ᑭᑭᑭᑭᑭ ᑭᑭᑭᑭ / 村岡康平 著

目次

言語の設定

音と文字

品詞

名詞

→格・語順

→代名詞

→人称代名詞

→指示代名詞

→不定代名詞

→再帰代名詞

→複数・敬語

→能動・受動名詞

→動名詞

形容詞

→数詞

→動詞の形容詞化

副詞

→動副詞

動詞

→繫辞

→再帰動詞・自動詞

→時制・相詞

→相詞

→助動詞

→重複

→否定

→疑問文

前置詞

関係詞

→名詞節関係詞

→形容詞節関係詞

→副詞節関係詞

接続詞

感嘆詞

→感嘆文

言語の設定

本来、Enilarefine の公用語は Ilarenig が話す言語、古イラレニク語(qrxinb Ilarenig ni noqA、SOV/AN の膠着語)だった。しかし、Enilarefine が magnifine へと変化する過程で、Arqenig 商人・貴族の国内における影響力の強大化は経済のみならず、文化にまで作用した。その影響は言語にまで及び、古イラレニク語は変質し、衰退した。

各地域で Arqenig の言葉と古イラレニク語、そしてその両者のピジンやクレオール言語が混在している状況を見かね、せめて学術上だけでも統一した言語を用いようという動きが広まった。そこで、各大学や学事賢人(文科省大臣)が中心となり、新しい言語、「新ノヒュア(nawinbnoqA)」を制定した。

文法は Arqenig の言葉寄りで、単語や造語法は古イラレニク語由来というこの言語は、当初は学術上統一言語としてや、教授言語としてのみ用いられた。しかし、王府内や大学内、更には下級の教育機関内でも多数の言語が混在している状況のもと、新ノヒュアは官吏や生徒同士が日常会話を交わす為の、共通の第二言語としての役割を勝ち得た。時代は下り、新ノヒュアは完全に古イラレニク語を日常から駆逐した。

音と文字

ノヒュアは5つの母音と18の子音から成り、原則的にはV、あるいはCVといった開音節構造をとるとされている(日本語の「ン」に相当する"-nb"除く)。しかし、実際には動詞や副詞等の最終音節の母音が弱化し、閉音節化することは一般的である。

母音

キナワ文字	アルファベット 転写	音声表記	補足
ṽ	U	u	語尾の場合には弱化することが多い。また、接辞によりUに他の母音が連続する場合、Uはwに変化する。
ṽṽ	I、i	i	
ṽṽ	A、a	a	
ṽṽ	E、e	e	
ṽṽ	O、o	o	

ノヒュアを記述するのに用いられている文字、nawinbkinawa (ナウインキナワ)はアブギダ体系の文字である。

ナウインキナワの場合、子音に母音記号が付随(線上、右上)しない場合はu音(ウ段)、母音記号が付随する場合はその母音と併せて読む。

子音と併せずに、母音が単独で発音される場合は母音記号ではなく、母音文字を用いる。アルファベット転写では母音記号を小文字、母音文字を大文字で表す。

例 noqa は「ノヒャ」だが、noqA なら「ノヒュア」になる。

Atenb の様に、n の後に続く点は撥音記号であり、n と併せて「ン」と読む。アルファベット転写では b を用いる。

文字の名称は、母音は読み方通りで、子音では「u 音」が名称となる。

子音

文字	転写	音声	補足
ṽ	s	s	[θ] でも可。

Ṛ	x	ʃ	
ṛ	r	r、ɾ	旧来は[ɾ]であり、lと区別していた。 現在は区別せず、[ɾ]や[r]寄りの発音も可。
ṭ	t	t	
ṭṣ	c	ts	
ṣ	z	z	
ṣṣ	q	ç	旧来は[x] であるが、現在では用いられない。 日本語的な感覚から[h]、[ɸ]（[f]）と混同しないように。
ṡ	w	w	自由異音として[ɰ]
ṣ	y	j	
ṣ	l	r	現在では r との区別なし。
ṣ	p	p	
ṣṣ	f	f	[ɸ] でも可
ṣ	n	n	n は語の最初・最後以外では「nw」ではなく、「N」で発音されることが多い。
ṣ	k	k	
ṣ	m	m	
ṣ	v	v	日本語の「バ行」とは異なり、[b] ではない。
ṣ	d	d	
ṣṣ	g	g	単語(複合語の場合は、各構成語)の終わりに来る g は、[kw]で発音することが一般的。

補助文字

文字	転写	
ː	b	n の後につき、撥音化(ん)する。[n]や[ɲ]等のいずれかに変化。

その他記号

記号	相当記号	意味・用法
.	コンマ	語や節を区切る。用法は英語と同じ。
、	ピリオド	文の終わりにつく。
。。	「」	会話文をくくる。
◌	転写 h	接辞と単語の間に入れ、基の単語が見やすい様に区別する際に用いる。発音上は無視する。

二重母音

開音節構造であり、連続する同一母音が長母音化する以外に二重母音は存在しない。

アクセント

ノヒュアは同音異義語を殆ど有さず、無アクセント言語である。

しかし、傾向としては、名詞や副詞は頭に、動詞や形容詞(-inb で終わるもの)は動詞の場合は最終より2つ目の音節が高くなる(高低アクセント化)ことが多い。

品詞

ノヒュアにおける品詞は名詞、形容詞、副詞、動詞、相詞、助動詞、前置詞、関係詞、接続詞、感嘆詞の9つである。

名詞

格

ノヒュアの名詞には主格、属格(所有格)、与格(間接目的格)、対格(目的格)である。

全ての格は固有の格マーカー(日本語の格助詞に相当するもの)を有するが、原則として、通常語順である限りは格マーカーを必要としない(属格を除く)。転置(倒置)された際にのみ必要となる

主格

文中で主語となる格であり、他動詞原則(後述)から「他動詞の動作主」である。

格マーカーは sa。

例 Ec fowete wom 私は水を飲んだ

ノヒュアでは無生物主語や非実体(概念的)主語が広く認められ、一般的である。逆に、印欧語に見られるような形式主語は存在しない。

例 wate lfarete rto 風が扉を開けた

例 se Ec kol tarko sas katinb 私がそれを食べることは難しい

属格(所有格)

主に所有を表す格であり、後続する語との関係を表す。

格マーカーは ni で、属格だけは必ず格マーカーの使用を必要とする。

例 Ecni xikaf 私の本

所有関係だけではなく、形容詞的に用いられることも多い。しかし、同じ意味をもつ形容詞が存在する場合は、その形容詞を用いる方が一般的な文である。

例 qzani mri 青の海→青い海 ※qzinb mriの方が一般的な文

与格(間接目的格)

動作の非直接的な受け手を表す格である。

格マーカーは ne で、与格は必ず対格句の直前に位置する。

動作の直接的な受け手(対格)とは別に、その直接的な受け手を更に受ける様な動詞において現れる。

例 Ec xirete kaU "mtanb" 私は彼に「ありがとう」と言った

Ec yakete kaU kifa 私は彼に石を投げた

上文では『ありがとう』という語、下文では「石」がそれぞれ「言う」、「投げる」という動作を受ける。そして、その「動作を直接受けたもの」を「彼」が受け、間接的に動作を受けることとなる。

対格(目的格)

動作の直接的な受け手を表す。目的語とも。

格マーカ―は to。

例 Ec tarete lko 私は魚を食べた

他動詞原則(後述)から、日本語や英語では自動詞である動詞がノヒュアでは他動詞であることも多く、それらは時に変則的(日本語や英語の感性から外れる)な対格をとる場合がある。

例 Ec wikete naxi 私は森へ行った

動詞(行為)そのものに焦点が置かれる文の場合、対格は省略されることがある。

語順

ノヒュアの基本的な語順は SVIO/AN、つまり「主格(主語)―動詞―(与格)―対格、形容詞(及び形容詞用法をする語)が形容される語の前に来る」という順である。

与格が存在する場合、基本語順においては与格は必ず対格(句)の直前に位置する。

基本語順に従う限り、格マーカ―は使用しない。言い換えると、格マーカ―を用いればどのような語順も許容される。

例 Ec tomete kaU Ecni Ezi 私は彼に私の剣を与えた

Ecni Ezito Ecsa tomete kaU

kaUne Ecni Ezito tomete Ecsa

しかし、この様に語順を入れ替えることはあくまで文学的表現であり、一般的・日常的にはまず基本語順が用いられる。

代名詞

ノヒュアにおける代名詞は名詞の一部であり、独立した品詞では無い。
格や単複による変化はしない。

人称代名詞

	中性・無性	男性	女性
一人称	Ec		
二人称	Ane		
三人称	kalg	kaU	kami

ノヒュアの動詞が人称による変化をしないため、ノヒュアでは会話文において一部の助動詞を用いた場合を除き、代名詞脱落は認められていない。

指示代名詞

ノヒュアにおいて、指示代名詞は kol と Ine の 2 つが存在し、格・単複変化はしない。

「基本形」を基本形とし、場所を示す場合は xa が付随する。「指示形」はここに記載はするが、文法的には「基本形＋属格マーカー」であり、品詞的にも実質的にも形容詞である。

kol

基本形	場所形	指示形
kol	kolxa	kolni

代名詞 kol (kol)は近方の事柄(手の及ぶ範囲)、自らの手元にあるものについて述べる際に用いられる。

Ine

基本形	場所形	指示形
Ine	Inexa	Ineni

代名詞 Ine は遠方の事柄(手の及ばない範囲)や相手の手元にあるものを示す。また、自らと相手の

間で共通(共有する)の事柄や、話題を指す場合にも用いる。

疑問代名詞

不確証な事柄について述べる場合、質問する場合、あるいは疑問に思う場合について用いる代名詞である。

後述する「不定代名詞」と異なり、あくまで不確証な際に、その不確証性に焦点を置いた文で用いられる。

例 qenig yenb qar Ec 誰が私を助けて下さい。(誰か私を助けて下さい を意図)

qenig qarete Ec 誰が私を助けた(誰かが私を助けた を意図)／誰が私を助けた？／誰が私を助けたのだろうか？

上の文では、依頼・要請の助動詞 yenb があることから、この文における焦点は動詞(この場合、「助けてください」)にあることがわかる。よって、文の主語には不確証性を有する疑問代名詞人物形の qenig では無く、不特定性を持つ不定代名詞人物形の Afig を用い、「誰か私を助けて下さい」とするべきである。

下の文では、上文と同様に、「助けた」という動詞に焦点を当てる場合は疑問代名詞では無く、不定代名詞を用いるべきである。しかし、「どの人が」私を助けたのだろうか、と「人物」に焦点を当てて質問したり疑問に思ったりする場合であれば、疑問代名詞が相応しい。

なお、疑問代名詞は疑問文を構成する(後述)。

また、様態形を除いた他の全ての形状は属格の ni を付け、形容詞化することができる。様態形は指示代名詞指示形と同様で、既に形容詞である。

基本形	人物	時間	場所	様態
qen※1	qenig	qentol	qenxa※2	qeninb※3

※1 形容詞形 qenni は日本語の訳すと「どの」であり、様態形の qeninb 混同しないように(qeninb は「どの様な」)。

例 qenni keto tarete Ecni lko どの猫が私の魚を食べた？

qeninb keto tarete Ecni lko どの様な(どんな)猫が私の魚を食べた？

※2 ノヒュアの繫辞 sas は存在動詞としての用法をしない。その為、以下の様な文は正しくない。

例 Ec sas qenxa 私は何処である(ここは何処ですか？ を意図)

正しくは、

例 kolxa sas qenxa 此処は何処ですか？

※3 時間形や場所形と違い、様態形は副詞として用いることができない。その場合は疑問副詞の qenlik を用いること。

例 Ane kwete lne qeninb どの様なあなたはそれをしたのですか？（どの様にあなたはそれをしたのですか？ を意図）

正しくは

例 Ane kwete lne qenlik

また、様態形に原因・理由を意味する語 rE や数を意味する Am を後続させると、それぞれ「何故」、「幾つ」を意味する。

例 qeninb rE toxete Ane どの様な理由があなたがあなたを留めたのですか？→何故あなたは止まった(止めた)のですか？

Ane yaAn qeninb Am あなたは幾つ欲しますか？→あなたは幾つ欲しい？

主格の項で述べたが、ノヒュアでは無生物・非実体主語が一般的である。

qeninb rE の場合、

例 qeninb rE toxete Ane どの様な理由があなたを留めたのですかの方が、

例 Ane senb toxete kam qeninb rE あなたはどの様な理由により止まったのですか？

よりも「自然」な文とされる。

不特定代名詞

事柄の不確証性に焦点を置く疑問代名詞に対し、不特定代名詞は動詞に焦点を当てた場合、あるいは事柄の不特定性に焦点を当てた場合に用いられる。言い換えると、不特定代名詞は特定の固有の事柄ではなく、より広い「範囲」としての事柄を表す。

意味	基本形	人物形	場所形
全て	Ule	Ulig	Ulexa
何れの	Af	Afig	Afxa
無・否定	nane	nanig	nanexa

Ule

基本形 Ule、及びそこから派生した代名詞は「全ての、全部」の意味を有する。

- ・基本形 Ule は「全て、全部」を意味する。

例 Ec tarete Ule 私は全部食べた

- ・人物形 Ulig は「皆、全員」を意味する。

例 Ulig na mecete lxe fareti 昨日、皆は家に居なかった

- ・場所形 Ulexa は「あらゆる所」を意味する。

例 mewi mec Ulexa 鼠はあらゆる所にいる。

※一見すると副詞に見えるが、他動詞原則があるため、れっきとした対格(名詞)である。

Af

基本形 Af は「若干・多少」を意味する副詞 Alf を語源とし、派生語は「何れか」を意味する。

- ・基本形 Af は「何か、何らか」を意味する。

例 Ec tar Af 私は何か食べる

- ・人物形 Afig は「誰か」を意味する。

例 Afig zate tar lne 誰かがそれを食べるだろう。

- ・場所形 Afxa は「何処か」を意味する。

例 lne zete mer Afxa それは何処かにあるはずだ。

nane

基本形 nane、そしてその派生語は「無・否定」を意味し、否定代名詞は単独で否定文を構成する。

- ・基本形 nane は「無、何も」を意味する。

例 Ec tarete nane 私は何も食べなかった

- ・人物形 nanig は「誰も」を意味する。

例 nanig mecete lxe nimati 誰も昨日は家に居なかった。

・場所形 nanexa は「何処も」を意味する。

例 Ec wik nanexa 私は何処へも行かない。

再帰代名詞

動作主と動作の受け手が同一の場合、同じ名詞や代名詞が重複するのを避けるため、再帰代名詞 Enb が用いられる。

例 kaU kemete Enb 彼は自らを傷つけた

再帰代名詞は、絶対自動詞(後述)を構成する際にも用いられる。

例 Ec sdarete Enb 私は自らを座らせた→私は座った

複数・敬語

複数

ノヒュアの名詞に単数・複数、及びに可算・不可算の概念は存在しない。

例 lko mecem Ena wom 魚が水の中に居る

この文の場合、魚が一匹なのか複数匹なのかは判別できない。

しかし、人を表す一般名詞(神含む)や代名詞(人称代名詞)は単数・複数の区別を要することから、これらに限り、接尾辞 hla を用いて複数形にすることができる。

例 Ec 私 →Echla 私達、我等

人称以外にも、複数であることが前提となっている場合や、複数であることを強調する場合、複数の種類の存在を示す場合にも用いる。

例 lkola mecem Ena wom 魚達が水の中に居る

この文は、複数の「異なる種類の」魚が水中に居ることを示す。

敬語

ノヒュアは学術言語として制定された為、古イラレニク語の様な敬語システムを有さない。敬意を示す手立てとしては、一般名詞に接頭する敬意接頭辞 mah と、固有名詞に接尾する敬称の hmaE が非公式に存在するのみである。

例 qona 子 →mahqona 御子息

sigig スィギク →sigighmaE スィギク様、スィギクさん

能動名詞・受動名詞

能動名詞

動詞に接尾辞 ta を接尾させることにより、「その動詞を行う者、行うのに用いる物」の意の名詞になる。

例 kiEf 彫る →kiEfta 彫刻家

kic 切る → kicta 小刀

受動名詞

動詞に接尾辞 ame を接尾させると、「その動詞をされるモノ」の意の名詞になる。

例 tar 食べる →tarame 食べ物

karim 害する →karimame 被害者

動名詞

動詞に特定の接辞を接尾させることで、名詞として機能させることができる。

動名詞により表せるのは、「概念化された動詞」と「現在、未来における事象」であり、「過去に起きた事象」に関しては「事実の名詞節関係詞節」を用いる。

・他動詞 動詞非過去形に ko を接尾。動作を一般概念化する際には目的語を必要としない。

例 Ec IUf tarko 私は食べることが好きだ

・自動詞 動詞非過去形に自発の助動詞 senb を接頭させ、ko を接尾させる。

例 senbAgko na sas moninb 怒ることは良くない

・再帰動詞 再帰する場合は無標(後述)なので、通常他動詞と同様に ko を非過去形に接尾させる。

例 Ec IUf Efko 私は眠ることが好きだ

・目的語／副詞を伴う動名詞句 英語における動名詞の様に原型が動詞であるため、意味上の目的語や副詞を伴うことができる。その際は、虚辞 se から始まる動名詞句を構成する。英語と異なるのは、動名詞の原型動詞の目的語は動詞の後ろでは無く、動詞の前(se との間)に置かれる。

例 se xtara kiEfko sas katinb 彫刻を彫ることは難しい
se qom keto Efenbko na sas monib 猫と寝ることは良くない

形容詞

形容詞は原則として名詞の前に置かれ、後続する名詞を形容する。-inb で終わる形のものが最も一般的であり、その他には属格によるものや、接尾辞 nanb や mar によるものが存在する。

形容詞は繫辞を含む動詞の対格となることができる。厳密に言うと、形容されている名詞が省略されることが多く、形容詞が形式的に対格の位置をとる。

-nanb/-mar

名詞 + nanb で「(名詞)ない」という表現になる

例 formnanb koniq 形無き世界 (form は形を意味する語)

名詞 + mar で「(名詞)を有する、(名詞)が多い」の意味になる

例 formmar koniq 形ある世界

比較級／最大級

比較級、最大級は存在しない。

比較には前置詞 nenb を用いる。

例 kaU sas moginb nenb Ec 彼は私より大きい

最大性を示すには、副詞 mota を用いる。

例 kaU sas mota moginb 彼は最も大きい

抽象名詞化

-inb で終わる形容詞の語幹に接尾辞 -is を接尾させることにより、「性質」「状態」を表す抽象名詞とすることができる。

例 laqinb 明るい → laqis 明るさ

序数

形容詞としての序数は数字に接尾辞 -nim を接尾させる。

例 Ifnim som 一番目の息子→長男

数詞

数	キナワ	読み
0	o	nal
1	i	lf
2	B	xe
3	F	tel
4	h	fe
5	J	kor
6	b	meq
7	l	nem
8	t	ye
9	j	kel
10	iO	to
11	ii	tolf
21	Bi	xetolf
100	iO0	fam
101	iOi	fam Onb lf
121	iBi	fam Onb xetolf
1000	iO00	tina
1121	iiBi	tina fam Onb xetolf
10000	iO000	yar
12254389	iBBJhFtj	tina fam xetokor yar fetina telfam Onb yetokel

数字そのものを指す場合を除き、ノヒュアにおける数詞は全て形容詞である（形容されるべき名詞を省略していると考えた為）。同様に、数詞は数そのものを指す以外は数字ではなく、文字を用いて記述する。数助詞は存在しない。

動詞の形容詞化(形動詞)

ノヒュアの動詞は印欧語における分詞としての機能を有さない為、そのままの形で形容詞として用いることはできない。形容詞として用いるには、接尾辞-hinb を接尾させる。その様に生成された形容詞を形動詞と呼ぶ。

通常の形容詞と同様に、「主格 sas/sim 形容詞(と省略されている被修飾語)」という文を生成することができる。しかし、それは決して相(アスペクト)を表す文ではない。

例 kaU sas kiqelemhinb 彼は読んでいる

この文は、進行相を表しているのでは無い。「どの人が彼だ？」と聞かれた際、「彼は本を読んでいる(人だ)」と彼の性質について述べる文である。

進行形形動詞

動詞の進行形(-em)に接尾辞-hinb を接尾させると、「現在、～している」の意になる。

例 Efemhinb miniso sas Ecni tekmi 寝ている女の子は私の娘だ

自動詞形は自発の助動詞 senb を更に接頭させる。

例 Ec qarete senbfalocemhinb tem 私は倒れかけている女の人を助けた

完了形動詞

動詞の過去形(-ete)に-hinb を接尾させる(完結の接尾辞の最後の e は消失する)と、通常形であれば「～された」と受動、自動詞形であれば「～した」の意になる。

例 nokrethinb Ur 殺された男
senbInafethinb Ixe 崩れた家

副詞

副詞は動詞、形容詞、副詞を修飾する。

単純副詞には様態、程度、頻度、日時の四種類がある。

全ての副詞は、文頭に置くことにより、その副詞を強調ないしは主題化することができる。

例 Ec wikete weza nimati 私は今日街まで行った
nimati Ec wikete weza 今日は街まで行った

他動詞原則がある為、一見すると場所を示す語や句は副詞に見えがちだが、対格である場合が多い為、注意すること。

様態副詞

様態副詞は主に動詞につき、動作がどの様に行われるかを表す。

接尾辞-lik により構成されているものが多い。

基本的には修飾する語の直後に置かれる。

例 qera wik yarlik はやく行け

程度副詞

程度副詞は主に副詞と形容詞にかかり、その程度や度合いを表す。

修飾する語に先行する。

例 kami sas wari faminb 彼女はとても美しい
kol faUma sas nel mewinb このお茶は濃すぎる

頻度副詞

頻度副詞は動詞につき、その動作がどの程度の頻度で行われるかを表す。

常に layez、しばしば mafez、稀に sarez、絶対に navez(～しない)。

被修飾語に先行する。

例 kaU layez foU faUma fato merso 食事の後、彼は常にお茶を飲む。
kaU mafez foU faUma fato merso 食事の後、彼はしばしばお茶を飲む
yal, Ec sarez wik lnexa はい、そこには偶に行きます。
nene, Ec navez wik lnexa いいえ、そこには絶対に行きません。

日時副詞

日時副詞は日時だけではなく、順序を含む、「いつ動作が行われるか」ということを表す。
原則としては文末に置かれる。

例 Ec wikete weza nimati 私は今日街まで行った

副詞としての序数は数に-lik を接尾させる。

例 Ec kU lne xelik 私はそれを二番目にする

動副詞

他動詞の語尾を変形させ、別の動詞にかかる副詞とすることができる。これを動副詞と呼ぶ。
動詞非過去形に-i を接尾させ、手段や様態を表す副詞となる。用法は様態副詞のそれに準ずる。

例 Ec nokrete kici kaU 私は彼を斬り殺した

動詞

他動詞原則

ノヒュアの動詞は全て他動詞である。つまり、全ての動詞は対格(目的語)を要する。これを他動詞原則と呼ぶ。

他動詞原則から、ノヒュアにおいて自動詞を表現するには助動詞を用いるか、再帰させる必要がある。他の言語では自動詞であっても、ノヒュアにおいては他動詞である為注意すること。

例 Ec wik Arqa 私は山へ行く

wik は「行く」を意味する動詞で、行く場所(目的地)を副詞としてではなく、対格(目的語)としてとる。また、上文の様に「場所」を対格とする動詞の場合、前置詞 ne は省略する。

繫辞

ノヒュアにおける繫辞は sas という「主格が対格の状態をとる、属性とする」の意の他動詞である。sas には存在動詞としての用法が存在せず、代わりに mec(生物)や mer(非生物)を用いる。

再帰動詞・自動詞

再帰動詞

日本語における、主に姿勢に関する絶対自動詞(絶対に対格を取らない動詞)の多くは再帰形をとる。再帰形とは主格と対格が同一である文形であり、再帰代名詞 Enb を対格とする。

例 Ec sdar Enb 私は自らを座らせる→私は座る

姿勢に関する動詞の場合、外部的要因は直接の要因では無い。無理矢理力づくでさせられた場合を除き、その動作は自発的な意思によるものである。ノヒュアではそれを「自らが自らにその動作をさせた」と捉え、再帰動詞として表現する。それ故、ノヒュアの再帰動詞はそれ単体で(助動詞無しで)使役動詞である。

なお、再帰動詞の対格が省略されている場合は再帰形であると見なす。言い換えると、再帰動詞を用いた文において、再帰形は無標、使役形は有標である。

自動詞

ノヒュアにおいて、姿勢動詞以外の自動詞は助動詞 senb を用いて表現する。

例 rto senb lfar ドアが開く

助動詞 senb は動作の外部的要因を暗示しつつも、動作に自発性を認める助動詞である。
動作の自発性を否定する場合は受け身の助動詞を用いる。

例 rto renb lfar ドアが開けられる

また、外部的要因に焦点を置き、それを明示する場合は、外部的要因を主格にした他動詞文を用いる。

例 wate lfar rto 風がドアを開ける

senb や renb を用いた文に、外部的要因を副詞句/節で示すことは可能ではあるが、一般的には外部的要因主語による通常他動詞文の方が自然な文であるとされる。

時制・相詞

ノヒュアの時制と相は深く相関しているが、文法的には独立している。

時制

過去	非過去
-ete	接尾無し(動詞原型)

ノヒュアにおいて時制は「過去」か「非過去」で区別する。

ノヒュアの動詞は無標で行為の完遂を含意する。つまり、相詞が先行しない限り、過去形は同時に完遂(動作の完了かつ目的した効果の発揮)を意味する。非過去に関しては現在完了を除き、完遂か否かは不定である。

例 Ec mwerete kaU 私は彼を説得した

この文の動詞 mwer(説得する)の動作は「対格を説得すること」であり、効果は「対格が説得に応じる」ことである。ノヒュアでは、動作だけでは無く、その効果の発生までが動詞に含まれているとされている。よって、以下の文は正しくない。

例 Ec mwerete kaU, tade kaU na qimete 私は彼を説得した(そして彼は説得に応じた)。しかし、彼は来なかった。

完遂性を否定するには、それを否定する相詞を用いる必要がある。

相詞

相詞	意味(相)	動作の状態	完遂性	備考
namo	未然相	未完(未始)	否定	
Aso	起動相	未完(始)	否定	
qaso	継続相	未完／反復	否定／個別肯定	
-em	進行相(形)	未完	否定※	期間を示す副詞句により肯定
no	完了完遂相	完了	肯定	非過去のみ
vato	完了未遂相	完了	否定	

相は相詞と呼ばれる語を動詞、及び助動詞の手前に置いて表す。

前述したが、ノヒュアの動詞には動作だけでなく、その動作の結果までもが含まれる。動詞に完遂が含まれるという言うのは、言い換えれば「動作が完了した場合、その動詞は完遂(所定の結果が生じた)した」と見なすということだ。しかし、動作の完了と完遂が同時では無い場合も当然ある。その為、ノヒュアの相詞は動作の進行、動詞の完遂性をそれぞれ別に定める。

相詞自体を否定することはできず(そもそも否定の na は助動詞であるため、相詞に先行し得ない)、また相詞同士を重複させることも不可である。

無標の過去形は完了完遂相であると見なすのに対し、無標の非過去形は動作の状態や完遂性等の情報を有さない、不定相であるとされる。不定相は状態動詞の様に「動作の具体的な進行の程度や結果が表せない動詞」、習慣、事実について述べる際に用いられる。

例 Ec mir Ane 私は貴方を愛する

kaU layez foU faUma fato merso 彼はいつも食事の後、お茶を飲む

woqa tar xiq 狼は鹿を食べる

未然相

動詞の動作が未だに始まっていないことを表す。しかし、それは動詞を否定するものではなく、その動詞の動作がまさに行われようとしていること、また行うとする意思を示唆するものである。

動作が始まっていないので効果は期待できず、動詞の完遂性を否定する。

例 Ec namo mwerete kaU 私は彼を説得しようとした。(説得の動作自体は未だ行われていない)

起動相

動詞の動作の始まりを表す。瞬間的な動詞の場合は、反復の開始を指す。

完了性、完遂性を共に否定。

例 Ec Aso mwerete kaU 私は彼を説得し始めた。(説得の動作を開始)

Ec Aso yakete kifa 私は石を投げ始めた。(反復的動作の開始)

継続相

動作を継続ないしは反復することを表す。状態動詞(sas、sim、teU 等)はその状態であることの継続、活動動詞はその動作の継続、到達動詞(tom 等)は反復、そして達成動詞(mak 等)は場合によって継続と反復のどちらにも成りうる。

動作の継続の場合は完了性、完遂性を共に否定。反復の場合、それぞれの動作の完了性を肯定するが、完遂性は不定である。

例 kaU qaso sasete finetak 彼は国王であり続けた

Ec qaso wikerete lxe 私は家まで歩き続けた

fato qaso tomete Ecni wase taram 父は弟に食べ物を与え続けた

kami qaso makete waxi 彼女は服を作り続けた(多数の服なのか一つの服なのかは不明)

継続の終了は前置詞 ram を用いた副詞句により表現する。完遂性を否定する旨が後続しない限り、動詞は完了かつ完遂したものと看做す。完遂性を否定するのに完了未遂相を用いる必要は無い(継続相は本来的に動作の完遂性が不定であるため)

例 Ec qase wikete Ecni lxe ram nima 私は今まで家へ進み続けた(そして今到着した)

Ec qase wikete Ecni lxe ram nima, tade Ec no na xatey 私は今まで家へ進み続けたが、家へは到達しなかった

進行相(形)

動作は始まっているが、未だ完了に向けて進行中であることを示す。完遂性も否定。

他の相詞と違い独立した語ではなく、過去形の様に動詞に接尾する。過去形かつ進行相である場合は -emete となる。

繫辞 sas は進行相をとらない。

例 Ec tarem lko 私は魚を食べている

Ec taremete lko 私は魚を食べていた

完了完遂相

動作が完了し、所定の効果が現れ動詞が完遂したことを示す相。

過去形は無標であれば完遂を含意するため、非過去形にのみ用いる。

過去から進行中であった動作が現在になり完了したとき、あるいは瞬間的な動作を丁度今行ったことを表す際に用いる。

例 Ec no tar lko 私は魚を食べた(今食べ終えた)

Ec no yak Kifa 私は石を投げた

完了未遂相

完了未遂と動詞否定形が合わさると「そもそも動作が完了しない」ことを表すのに対し、動作は完了したが所定の効果が現れず、動詞が完遂しなかったことを完了未遂相は表す。動作が行われなければ当然ながら動詞は完遂され得ない為、逆に完遂性を肯定し、動詞の完了を否定する相詞は存在しない。

過去形の動詞完遂性を否定する。

例 Ec vato mwerete kaU, neqce kaU na qimete 私は彼を説得したが(説得という行為を行ったが、彼が納得せず、従って)、彼は来なかった。

ある動詞の動作による効果が明らかに現れる様に動作を行ったのにも関わらず、所定の効果が得られなかったことを示すことに用いることもできる。

例 Ec vato nokrete kami 私は彼女を殺した(致命的な状態に陥れた)が、彼女は死ななかった。

助動詞

助動詞は動詞に先行し、態(ヴォイス)と法(モダリティ)を定める。

助動詞に先行される動詞を後続動詞と呼ぶ。

	肯定形	肯定形の意味	否定形	否定形の意味
希望度に関する助動詞				
希望・欲求	yanb	～したい	nahyanb	～したくない
許可要請	yane	～させて下さい	nahyane	～させないで下さい
依頼・要請	yenb	～してください	nahyenb	～しないでください
必要性に関する助動詞				
条件・許可による	fanb	～できる・～しても	nahqfanb	～できない

可能		よい		
能力による可能	qanb	～できる	nahqanb	～できない
提案	qate	～したらどうか	nahqate	～しなければどうか
好転・適切	qane	～した方がいい	nahqane	～しない方がいい
当然	qete	～すべきだ	nahqete	～すべきではない
義務	qene	～しなくてはならない	nahqene	～してはならない
命令	qera	～しろ	nahqera	～するな
可能性に関する助動詞				
可能性	zanb	～するかもしれない	nahzanb	～しないかもしれない
推量	zate	～するだろう	nahzate	～しないだろう
推定	zane	～するらしい	nahzane	～しないらしい
確実	zete	きっと～する	nahzete	きっと～しない
期待度に関する助動詞				
後悔・不本意	canb	～してしまう	nahcanb	～してしまわない
好意・期待帰結	cane	～してくれる	nahcane	～してくれない
意思に関する助動詞				
勧誘	tate	～しよう	nahtate	～しないでいよう
その他の助動詞				
自発(自動詞化)	senb	他動詞の自動詞化	×	×
使役	kenb	～させる	nahkenb	～させない
受身	renb	～される	nahrenb	～されない
打消・否定	na(nah-)	～しない	×	×

yanb(希望・欲求)

後続する動詞を行うことを望んでいることを表す。

例 Ec yanb foU lek 私は酒を飲みたい

yane(許可の要請)

与格が後続動詞を行うことの許可を主格に依頼・要請することを表す。
会話文で用いられることが一般的であるため、主格は省略されることが多い。

例 (Ane) yane lmr Ecla lxe 帰らせて下さい。

後続動詞が与格をとる動詞の場合、本来の与格は副詞句になり、対格に後置される。

例 (Ane) yane xig Ec kami ci rUq 彼女を弓で射させてください。

yenb(依頼・要請)

主格に後続動詞を行うことを依頼することを表す。
yane と同じ理由から主格は省略されることが多いが、yane と異なり依頼主が表示されない。

例 (Ane) yenb nokr kami 彼女を殺して下さい。

fanb(条件・許可による可能)

後続動詞を行うことが、「条件を満たしている為」、あるいは「許可がある為」に可能であることを表す。

例 Ec fanb Enik finetakni pila 私は王宮へ入ることができる

主格が一人称で無い場合は許可を表すことがある。

例 Ane fanb tar kol (あなたは)これを食べても良い

qanb(能力による可能)

許可可能の fanb に対し、能力的に可能であることを表す。

例 Ec qanb Ef ta Uletol 私はどこでも寝ることができる。

qate(提案)

後続動詞を行うことを提案することを表す。
基本的には疑問文として用いるので、文末に ke(後述)が設置される。

例 Ec qate wik ke 私が行きましょうか？

Ane qate Ef yarlik ke あなたは早く寝たらどうか？

Ecla qate wik weza ke 私達は街に行きませんか？→一緒に街へ行きませんか？

qane(好転・適切)

後続動詞を行うことが事態に適切であること、行うことにより事態が好転することを表す。

例 Ec qane maU kami fatoti 私は明日彼女と会いに行った方がいい

Ane nahqane xir lne あなたはそれを言わないほうが良い

qete(当然)

後続動詞を行うことが当然であることを表す。義務では無いが、状況的に考えて必然である場合に用いる。

例 kaU qete ldan Ec 彼は私に謝るべきだ

qene(義務)

後続動詞を行うことが義務であることを表す。

例 Ec qene wik finetak ni pila fatoti 私は明日、王宮へと赴かなければならない

qera(命令)

後続動詞を行うことを命令するのに用いる。

主格は命令される人であり、一人称を入れることも可能である。二人称が入る場合(直接命令)は主格を省略することができる

例 (Ane) qera nokr kami 彼女を殺せ

zanb(可能性)

後続動詞を行う可能性があることを表す。

後述する推量・推定とは異なり、根拠・無根拠のもとである事実を断定するのではなく、あくまで可能性の存在を漠然と言い表す際に用いる。

例 kaU zanb qim kolxa 彼はここへ来るかもしれない

zate(推量)

後続動詞が行われることを、明確な根拠を背景とせずに推量すること。

例 kaU zate qim kolxa 彼はここへ来るだろう

zane(推定)

何らかの根拠を背景に、後続動詞が行われることを推定することを表す。

例 kaU zane qim kolxa 彼はここへ来るらしい

zete(確実)

後続動詞が行われることが確実であることを表す。

例 kaU zete qim kolxa 彼はきっと来るはずだ

canb(後悔・不本意)

後続動詞が行われることが不本意であり、その動詞が行われることを望まなかったことを表す。
完結の意では無い。

例 Ec canb wikete kaUni lxe 彼の家まで行ってしまった

cane(好意・期待帰結)

後続動詞が行われることが話し手にとって好ましく、それが行われることを期待していたことを表す。

例 kami no cane qim Ecni lxe 彼女は私の家まで来てくれた

tate(勧誘)

後続動詞を共に行うべく、他人を勧誘することを表す。
主語は確実に Ecla であるので、省略される。

例 (Ecla) tate foU lek 一緒に酒を飲もう

senb 自発(自動詞化)

一部の動詞(自他動詞)を自動詞化するのに用いる。

他の助動詞と重複する場合、senb は必ず動詞の直前に置かれる。

例 Ecni we senb danir 目が痛む

kenb(使役)

主格が与格に後続動詞を行わせることを表す。使役態を形成。

例 kaU kenb nokrete Ec kami 彼は私に彼女を殺させた。

renb(受け身)

文法上の主語が実際は動作の客体であることを表し、受動態を形成する。

実際の動作主体を表す場合は、副詞句を用いる。

例 kami renb nokrete kam kaU 彼女は彼に殺された

na(否定・打ち消し)

後続動詞を行うことを否定する。

例 Ec na tar lne 私はそれを食べない

他の助動詞に接頭し、否定の意味合いを添付する。

例 Ec nahyanb nokr kami 私は彼女を殺したくない(欲求・希望の否定)

助動詞の重複

助動詞 senb、kenb、renb は他の助動詞と重複することがある。重複する場合、助動詞の順番には二つのルールがある。

- ・ senb は必ず動詞の直前に来る

senb は助動詞の形をとっているが、実際は自動詞化のマーカーであるため。

・文の意味を構成する上で、より大きな役割を果たしている助動詞が前に来る。

例 Ec qate kenb nokr kami ke 彼女を殺させましょうか？

この文の場合、文自体の最も大きな機能は「提案」である。その為、提案の助動詞 qate が最初に置かれる。

例 Ec nahyanb renb nokrete 私は殺されたくない

この文では「殺されたく無い」という「欲求」を表す機能が最も強いと言えるので、欲求の yanb が受け身 renb に先行する。

否定

ノヒュアにおける否定は、不特定代名詞の否定代名詞以外では「動詞(動作)」の否定であり、「名詞」の否定では無い。そもそも、否定の na は代名詞であるため、動詞にしかつかない。

例 Ec na kof qakra 私はお金を持っていない

しかし、状態動詞 sas や sim に関しては、動詞の否定では無く、名詞に接尾辞 nanb を接尾させることによる名詞否定を行うことが可能である。

例 Ec sas qakrananb 私は文無しだ

否定代名詞はそれ単体で否定文を構成する。そして、二重否定は肯定を意味せず、「強い否定」である。

例 nanig qimete Ecni lxe 誰も私の家に来なかった
nanig na qimete Ecni lxe 誰一人として私の家に来なかった。

部分否定

部分否定には否定副詞 nanlik を用いる。nanlik は様態副詞であり、用法は様態副詞のそれに準ずる。

例 Uletol qimete nanlik Ecni lxe 全ての人が私の家へ来た訳ではない

否定形の助動詞に被せることも可能

例 Uletol na qimete nanlik Ecni lxe 全ての人が私の家へ来なかった訳では無い

疑問文

疑問文は「疑問代名詞」、あるいは疑問詞 ke の存在により構成される。

疑問代名詞はそれ単体で疑問文を構成し、疑問詞 ke と重複させてはならない。

例 qenig nokrete kami 誰が彼女を殺した？

kami renb nokrete ke 彼女は殺されたのか？

逆に言うと、疑問文の性質を有さないのであれば、疑問代名詞では無く不定代名詞を用いる。

例 Ec na qn Afig, tade kalg sas wari moninb kiEfta 誰かは知らないが、その人はとても良い彫刻家だ

前置詞

前置詞は、動詞と名詞の関係を表す語であり、名詞の直前に置かれる。

他動詞原則から、動詞 wik(行く)の様に対格が「何処へ、何処に」と行った形の対格をとる動詞の場合、前置詞 ne 等は省略する。

否定形前置詞と否定形助動詞が重複しても、二重否定から肯定にはならない。

前置詞	意味
時間に関する前置詞	
ta	特定の一点(非広域)を指し、「～に、～で」
fare	「～の前に」
fato	「～の後に」
Elma	広い期間を指し、「～の間」
Ena	広い期間を指し、「～中(ちゅう、じゅう)に、～の内に」
Ikre	一定の連続する時間を指し、「～を超えて、以上」
tori	「(ある期間中)～を通して」
fori	「～から、～以来」
varak	「～を通り越して」
ram	「～まで」
動作の様態(非位置)に関する前置詞	
ci/feci	「～で、～を用いて」 行為に伴った道具(接触的手段)を示す／「～を用いずに」 行為に指定された道具(接触的手段)が伴わなかったことを示す
mirto	「～に関して、～について」
ta	「～で、～において」
fem	「～に反して」
qelm	「～に沿って、～に則って」 例 マニュアル、説明書
Enate	「～の間で」
wazma	「～の他に(も)」「～も同様に」
Ikre	「～を超えて」 例 職権、権限
fori	「～から、～より」

ne	動作の直接的な対象ではなく、効果が波及する対象を表す。「～へ、～に、～まで」
qom/feqom	「～と共に、～を伴って」 人物や生物が伴うことを示す / 「～を伴わずに」 後続する人物・生物が伴わなかったことを示す
totak	「～を除き」
kam/fekam	「～によって(より)、～を用いて」 動作が後続する人物、生物、手段等により達成されたことを示す。直接的に接触し、作用する道具を用いた場合(ハンマーやドライバー等)は ci、鏡や虫眼鏡等、間接的な手段として用いた場合は kam を用いる
yare/fezare	「～の様に」 後続する節と比べたり、例としてあげたり、動作が行われる様が類似していることを示す / 「～の様ではなく」 後続する節と類似していないことを示す
qata	「～から離れて」 例 職務など
tori	「～を通して」
nenb	「～より～」 主に比較に用いる
Afe	目的を表す。「～為に」
動作の様態(位置)	
fori	「～から、～より」
ne	「～へ、～に、～まで」
ta	「～で」 開けた場所、敷地全体、概念(学校の建物ではなく、学校という概念)等を示す
Ufe	「～の上に」 指し示す物体同士が接している
Ufam	「～の上方に」 指し示す物体同士が接していない
lkrex	「～を横切って」
fato	「～の後ろに(を)、～の背面に(を)、～の奥に」
qalq	「～に対して、～の対面に」
fem	「～の反対に」
qelm	「～に沿って、～と並んで」
karak	「～の周りに(を)」
fare	「～の前に(を)、～の全面に(を)、～の手前に」

Ina	「～の下に」 指定されたもの同士が接している
Inam	「～の下方に」 指定されたもの同士が接していない
Ixito	「～の側に、～の横に、～の隣に、～の傍に」
Eate	「～の間に(を)」
Ikre	「～を越えて」
Ena	「～の中に、～の内に、～の内側に」 建物・部屋の内部等を示す
lixa	「～の近くに」
qata	「～から離れて、～の遠くに」
taq	「～に接して」
varak	「～を通り過ぎて」
tori	「～を通って、～を通し」

関係詞

関係詞とは、関係節の存在を示すマーカーとなる品詞である。

関係節とは、関係詞により導かれ、文法上なんらかの意味を有する一連の語の集まりであり、中には必ず動詞が含まれる。

関係節には役割により名詞節、形容詞節、副詞節の3つがある。

名詞節関係詞(節)

名詞節とは、文中で主格と対格の役割を果たす節である。

名詞節では関係詞を省略することができない。

それぞれの名詞節は対応する格の代名詞のように振る舞い、名詞節を導入する関係詞はマーカーを接尾させることで転置することが可能

意味	形式
事実	sal+SV(IO)
分岐	sal+SV+mac+na+(I)O / sal+SV+(IO)+mac+(IO)
動作主体	sal+(S)V(IO)

事実

過去に起きたことや、現在における状況といった具体的な事実を表す。行為そのものを概念化した動名詞句との違いに注意。

例 Ec qn sal KaU tarete Ine 私は彼がそれを食べたことを知っている

分岐

事実の名詞節関係詞(節)から派生した形である。

ある動作及びに事象の実現・非実現、もしくは実現・非実現の際の対象が分岐している事実を表す。

例 Ec na qn sal kaU tarete mac na Ine 私は彼がそれを食べたかどうかを知らない。

Ec na qn sal kaU tarete lko mac xem 彼が魚を食べたのか肉を食べたかどうかは知らない。

人物

動詞による条件が提示され、その条件を満たす人物を仮定し、補う形で文中に入る。

例 Ec qn sal tarete Ine 私はそれを食べた人を知っている

形容詞節関係詞(節)

形容詞節は、文中で名詞・代名詞の後ろにつき、先行する名詞・代名詞を修飾し、説明・限定する役割を持つ。全ての形容詞節関係詞は名詞に後続する。

形容詞節関係詞の格マーカーは、文中での格ではなく、先行する被修飾語の詞節内での役割に応じてつけられる。

名詞節と同様に、人物・非人物以外の区別は無い。

主格	所有格	目的格
seOsa	seOni	seOto

例 Ine sas lxe seOto Ec qmecete これは私が住んでいた家です。

関係詞脱落(Ø 関係代名詞)は認められている。

例 Ine sas lxe (seOto) Ec qmecete これは私が住んでいた家です

制限用法と非制限用法

コンマで形容詞節をくくれば非制限用法に、くくらなければ制限用法になる。

非制限用法: 形容される名詞が特定される(話手と聞き手で共通の認識がある等)場合。

制限用法: 形容される名詞が特定のものではなく、「形容されている条件にあてはまるものは全て」のニュアンスを持つ。

副詞節関係詞(節)

副詞節は文中で副詞として機能する節であり、動詞を修飾する。

副詞節は最初から「副詞節」としての定形を有するものではなく、文法的に導き出されるに過ぎない。その為、他の節の関係詞や、前置詞(肯定形のみ)等により導入される。

動詞のどの要素を修飾するかによって、いくつかに分類できる。

時間に関する副詞節関係詞

tetol	～するとき、～の時
Uletol	～するときは常に、～の時は常に
Ema	～する間、～の間
fare	～する前
fato	～した後。
fori	～以来、から。
kam	～までには。
ram	～まで(ずっと)。「～するまで～してはいけない」の様に、条件として用いることも可能。
sanbya	～するや否や。
	その他、動詞が「いつ」行われるかという質問・疑問に応える副詞・前置詞から始まる複合関係詞。
場所に関する副詞的關係詞	
texa	～する場所で。
Ulexa	～する場所全て、～の場所全て。
	その他、動詞が「何処で」行われるかという質問・疑問に応える副詞・前置詞から始まる複合関係詞。
理由に関する副詞節關係詞	
rEs	～何故なら～。文頭に来た場合は「～なので」
Oze	～として～。 例 Oze finetak, Ec qene tek Ecni falme 王として、民の安全を守らなくてはならない 様態にもなり得る。
条件・仮定・範囲・限定に関する副詞節關係詞	
rak	もし～なら。
Efra	～する限り～、～するなら。
ferak	～でないなら。
yaEf	～の(動詞する)限り～。 行為が継続することではなく、範囲により限定。私が知るかぎり、等。
目的に関する副詞的關係節	

Afe	～の為に、～する為に。
nacaf	～しない為に、～しない様に。
結果に関する副詞的關係節	
tekonb	～する程～した(になった)。A tenkonb B で「B する程に A だった」
mamoz	～結果～した。A mamoz B で「B の結果 A した」
譲歩・譲渡・逆説(非順当)に関する副詞的關係節	
dete	～にも関わらず、～のに
Edi	～例え～であっても。
Ema	～する一方で～。
様態に関する副詞節關係詞	
yare	～の様に。
feyare	～と異なり～。
nenb	～よりも

接続詞

接続詞は文、節、句、そして語同士の関係を示す詞である。

接続詞は語と語、文と文等、同種のことを対等な関係で結ぶ。文同士の場合、重文を成す。つまり、独立節同士を繋ぐ。

Onb	同じ品詞・形態の語・句を結ぶ。A Onb B で「A と B」もしくは「A そして B」の意味。
Efna	語・句・節同士、あるいは異なる要素同士を結び、A Efna B で「A だけではなく B も」を意味する。
mac	前後の語・句・節のどちらか一方が対象となる・実現する。「A か B どちらか一方」「A もしくは B」の意味。
moc	前後の語・句・節のどちらか一方、あるいは両方が実現する。「A か B、あるいは両方」の意味。
take	先行する句・節と後続する句・節が相反し、関係が順当でないことを示す。「A だが B」
rese	先行する句・節の結果として後続する詞が導かれることを示す。「A なので B」

文節接続詞

文節接続詞は、節・文同士のみを結び、話の展開を補助する接続詞である。文・節の頭にのみつき、文の頭につく場合はコンマが直後に入る。

文節接続詞	意味
sima	並列。前の文と対等な事象としての文であることを示す。「また」
xine	添付・添加。前の節・文に付け加えることを示す。「そのうえ、更に」
caki	転換・無視。話題が変わることを示す(前後の文脈が関係無い場合)「ところで」、または前の文脈が無視されたことを示す。「それでも、とにかく」

また、文節接続詞の様に文頭につき、事柄(文)の順序を定める「順序接続詞」というものもある。順序接続詞は文頭のみにつく。形状こそ他の詞(形容詞・副詞)だが、用法的に接続詞として扱う。

接続詞	意味
-----	----

Iflik	一番目に、最初に。
Asifa	(まず)はじめに、はじめ。
xelik~(数+lik)	○番目に。
Exa	次に。
Atenb	(順序的な意味で)そして、そうして。
trase	最後に、終わりに。

感動詞

感動詞とは、感動・応答・呼びかけ・挨拶にあたる品詞であり、単独で文を構成することもできる。

感動	AI(ああ)、OU(おお、おう)、yas(よしっ、よっしゃ等の好ましい出来事のと き)、xik(くそっ、ちくしょう等の好ましくない出来事のと)、Ara(なるほど、そ うか等)
呼びかけ	qol(おい、主に男性が用いる)、mel(ねえ、主に女性が用いる)
応答	yal(はい)、ya(うん)、nene(いいえ)、yoU(「はい」のくだけた言い方)、 nelye(「いいえ」のくだけた言い方)
挨拶等	moninb Emra(朝の挨拶) nimatisa(日中の挨拶) moninb noqto(日が暮れた後の挨拶。こんばんは) moninb Efa(おやすみなさい) mtanb(ありがとう。動詞の主語・目的語を省略した形。mtanb Ane でより丁寧 に。料理をした人に対していうご馳走様、の意も) (Ec) fotaq tarafra / (Ec) sas tarafra(お腹が空いた) Aldanb(ごめんなさい) nacikem(どう致しまして) qenali(どうぞ) qatenera(いらっしゃい、いらっしゃいませ) EneUfim(おじゃまします) Imenera(いつてらっしゃい) malnera(おかえり、おかえりなさい) xenima(ただいま) Imemif(いつてきます) sarimExif(はじめまして) tarimenif(いただきます) moninb rename(さようなら、rename はくだけた言い方) matire(さようなら、近々会う場合) taknimata(久しぶり) (Ane) sas nelminb(おめでとう、お疲れ様)
掛け声	Sel(さあ、それっ等)
その他	qeE(えーっと、考え事をしている時、悩んでいる時など)、Ere(あらら、あれ ま、ありゃー、あちゃーなど、驚いた時・不本意・好ましくないときに用いる)、 A(驚いた時、思い出したときの あっ)

感嘆文

感嘆文は文頭に疑問代名詞 qeninb を置き、文末に感嘆マーカの re を置く。それ以外は通常の文法に基づく。

例 qeninb kaU sas mloxinb re 彼はなんて強いのだろう！